

來ます。これらの現象は、皆表面張力の作用によるのであります。

そこで、此度は前よりも簡單に出來させる面白く、とを一二行つて見ませう。皆さんは、金網でつくれる細き目の篩を御存知でありませう、その篩の水を注ぎて御覧なさい、水は皆網の目を通りませんが、次の如くにすれば、水は通りません。即ちパラフキンを融解して、篩の網の目の所をひたし、これを取りて一寸振りて、餘分のパラフキンを掃ひ去りますれば、パラフキンは、針金にのみ、附着して居りますから、網の目はふさがりません、よりに篩の底に紙を布きて、靜かに水を注げば、紙の上に浮んでも水は、下へと通らずに、その中へ依然として、存することは、恰かもコップの中に、水を盛れると同じ様であります。

又針をば、油に浸したる布片にて拭ひ、靜かに水面

に浮べますと、水中には沈まないです、これは針が、水の表面をやぶりと、沈むことが出來ないからであります、この時アルコールの一二滴を注ぎますれば、アルコールの表面張力は、水の表面張力に比べて小なるが爲めに、針は沈みます、表面張力に關して、諸氏が自分で試みられることの出來ることは尙ほ澤山ありまするが先づこれで筆をとめますることに致しまして他日折が有りますれば又筆硯を拂うて見ゆることに致ませう。

日本化したる外國語

擊水生

以上擧げたのは、今日誰でも知り切つて居る語であつて、擧げ來れば、この様なのは、甚だ澤山である。これらは、始は外來語として皆つかつて居たのが、今日

では殆ど日本語同様になつて居る。オムレッツとかピフ
テキとかペースボールとかテニスとか謂ふ語も、今に
この通りになると思ふ。

そこで、これ等は、大抵西洋諸國からきて居るのだ
が、こんどは、一つ梵語即印度から來て居るのを并べ
て見やうならば、これは又其數も甚だ多い。それは、
佛法といふものが、頗る早く我邦に入り込んで來たか
らである。併こゝでは其能く知られて遣つて居るのを
少し許り出すことにして、一先これで措いて折を見て
他日御咄することにしやう。

卒塔婆。或は塔婆といひ、又塔ともいふのは略して
言つたので、印度語では、高顯の義である。

刹那。瞬間といふ意にて、即時の最も短き意。

茶毗。火葬のことであつて、印度では、物を焼く義。

である。

檀那。これは印度では施主の意味である。僧侶な

に、何が施して呉れる人を云つたのだが、今日で
は廣く主人といふ意にも使ひ、或は下の者が上の
人を呼ぶ一般の用語となつて居る。

達磨。これは法の意味だといふことである。

涅槃。不滅不生の意。

沙門。又桑門と書く。僧のことをいふ。

懺悔。悔ゆること。

斑。やはり梵語でまじつてる意。

魔。佛心を迷はす意。

佛。さどりの意。

夜叉。鬼の意に用ひてゐるが、もとは兇暴とか勇壯

とかの意である。

和尚。僧位の名だといふ。

伽藍。精舎の意。寺なり。

尙この他にも頗る多いが、要するに皆佛語である。
 以上の外、朝鮮語とか、蝦夷語も甚だ多く、は入て
 居るのであるが、これは、後に譲るとして、こゝに
 は、たゞ大體を列舉したまで、ある。

(完)



講義

育 兒 學 (續)

中 村 五 六

○體溫。

幼兒が母體を離れて獨立の生活を營むに要する事柄
 にて、右に述べましたる三の變化の外に、また一つの
 變化即ち體溫の供給の變化があります。總ての溫血
 動物は、一定の體溫を保つこと必要でありまして、其

の溫度が高きに過ぎ、または低きに失するときは苦し
 みを受け、甚しき場合には死に至ります。此の危険を
 避くる爲に、人間の體は身邊の空氣が自然の適度に合
 はずとも、常に等しき溫度を保つやうに出來て居ます。

此の溫度は、健康なる大人にありては、攝氏三十七度
 (華氏九十八度)であります。それで、人間の身體に溫
 熱を生ずるの用意なきときは、速に冷却して夏季にて
 も不幸に陥るの結果を免かれませぬ。これを救ふの用
 意は、如何に出來て居ませうか。

體溫の起る第一の源は、食物であつて、これが發し
 また廣がるのは、消化、呼吸、循環によりて出來るも
 のですから、食物を給することは十分でなければなり
 ませぬ。されども神經もまた體溫を保つに著しき力を
 有して居ますれば、これが働きてゐますときは、體溫
 はいつとも高く、働かざるるとき、たとへば眠れる間は常